

話し合い活動の手引き

§ 3 議題を集める

話し合いをはじめには、そのテーマとなる「議題」が必要です。ところが、“そもそも議題が集まらない”という声をよく聞きます。このことは、子どもたちが学級会活動に関心や意欲をもたない、つまり学級の問題に関心をもっていないということでもあります。子どもたちが自分たちの生活に対して問題意識をもつようになればいいのですが、そのためには教師が子どもたちのつぶやきをアンテナでキャッチすることと同時に、適切な指導が必要になってきます。そこで、その2では「議題を集める」ことについてまとめてみます。

■ 議題をどこから集めるか

まずやって欲しいことは「ポストの設置」です。子どもたちの思いを受け取る場所が必要です。みなさんの学級に議題ポストはありますか？ まずはそこから始めてみましょう。

しかし、議題ポストを置いたからといって、議題がそうそう集まるものでもありません。ポストに入っていないと、悲しくなってしまうですね。しかし、それは子どもたちの中に議題案がないというわけではありません。ポストに入らなくっても、子どもが切実に感じている問題が転がっているものなのです。そこを考えるヒントにしてみたいと思います。

ポスト以外に議題になりそうなことが転がっているのは、次のようなことです。

- 学級日誌や個人の日記
- 朝の会・帰りの会で問題になったことの中に
- 遊びの中(休み時間)のみんなの声(つぶやき)に
- 係活動や当番活動の様子に
- 掃除や給食の子どもの訴えから
- 他のクラスの活動や児童会の活動の中に
- 班長会などの話し合いに

これらを活用しない手はないと思いませんか。ただし、このような場で拾い上げた問題も、当の子どもにも内容がはっきりしないものが多くあります。そういう場合には、それらの問題を取り上げ、何が問題なのか、どのようにしたらいいと思っているのかを教師との対話の中で明確にさせるということが大切です。

■ 教師はどんな手を打てばよいか

上記のようなところから議題を集めるといっても、教師は何もしないでもいい、ということではありません。それなりに手立てをうつ必要があります。その技をまとめてみます。

〈その1 環境をつくる〉

①「議題ポスト」を設置する

先に述べたように、まずポストを置いてみてください。そして、ただ設置するより、ちょっとひと工夫してみましょう。例えば、ポストに愛称をつけるとよいですね。議題の種類から考えて、「こまったポスト」「やってみようポスト」「工夫ポスト」という名前ははどうでしょう。高学年ではいつ、誰が開くのかを明記しておくことが望ましいです。

② 掲示物で意識化を図る

始めの頃は「学級会活動の流れ」を掲示しておくとうよいと思います。学級の問題は、学級のみんなで解決するんだということを意識させるのです。

「議題処理コーナー」も必要です。出された議題がどのように処理されたのか、みんなに分かるようにしておくことが大切です。

③ 議題カードを置く

ポストの横には、議題カードを置いておきます。低学年では、色分け（赤は集会関係、青は係関係、黄は遊びや生活関係など）したものを置くのも効果的です。

〈その2 低学年の子どもたちへの手だて〉

学年の子どもたちはよくつぶやきます。教師にも訴えてきます。そのつぶやきから議題になりそうなものを拾いあげ、意識づけるようにします。「へえ～、そんなことがあるんだね。みんなで話し合ってみたらどうかな」というように助言し、提案を促すようにします。

教師の方から1・2回議題を提示し、どのようなことが議題になるかを理解させたり、議題を2・3つ用意して、その中から1つ選ばせたりする方法もあります。

〈その3 子どもとの触れ合いの機会を増やす〉

☆放課後や給食の時間など、自由に語り合える時間をもちましよう。

☆教師への訴えや相談ごとを丁寧に聞き、解決法を一緒に考えましよう。

☆学級日誌などを丁寧に読み、朱書きによる対話を行いましよう。

☆班会議で、各班からの問題点を吸い上げましよう。

※子どもたちとのふれあいの中から議題になりそうなものを見つけたら、その子に提案を促す助言を行います。

●児童のつぶやきから議題になりそうなものを拾い上げ、意識づけてあげます。

例)「そんなことがあるのか。みんなで話し合ってみたらいいね」

●児童が自ら気づき、議題ポストに入れるのが望ましいのですが、気づかない場合には助言します。

例)「今の話題は議題ポストに提案してみたらどうかな」

〈その4 議題の書き方を教える〉

せっかく問題意識をもっても、議題の立て方がわからないのでは、学級会に取り上げることもできません。そこで全員に一度は学級会の議題の立て方、書き方を指導しておきたいものです。そこで、学級の全員に議題案を書かせるようにします。その時、議題の種類にはどのようなものがあるかを教えてあげる必要があるかもしれませんね。係や生活グループごとに書かせてもよいと思います。

〈その5 子どもの問題意識を整理する〉

議題案を持ってきた子どもとよく話し、問題を整理させます。「やってほしいこと（要望）」か「やってみたいこと（願望）」か「こうなるといいこと（希望）」か、いっしょに考えてあげましよう。

また、その議題案における話合い活動をイメージさせます。話し合うことによって、学級の何がよくなるのかを想像させるのです。高学年だったら、「それをみんなで話し合うと、何がよくなるの？」と聞くことが大切です。

〈その6 級外の人を使う〉

話合いの必然性をつくるのに級外の人に協力してもらうのも有効です。例えば、学級のボールの使い方が悪かった場合、生徒指導主任に頼んで「ボール遊び禁止のおふれ」などを黒板に貼っておいてもらったこともあります。理科室を使った後の片付けができ

なかったので、理科専科の先生にお願いして「理科室使用禁止事件」というものを起こしたこともあります。いいことであれば、校長先生に頼んで手紙（電報形式で）を書いてもらうなど、子どもたちが前向きになる有効な手立てです。

〈裏技〉

全員に目をつぶらせ、下を向けさせます。

「みんなで話し合った方がいいと思うことがある人は静かに手を挙げましょう」
だいたい数名が手を挙げます。そこで、顔を上げさせ、次のように言います。

「今、半分の人が手を挙げてくれました。紙を配るので、手を挙げた人は自分が思ったことを、手を挙げなかった人は、手を挙げた人がどんなことを話し合いたいと思っているかを予想して書きましょう」

こうすると、ほぼ全員の子が何かを書いてくれます。

ただし、この方法は高学年には不向きです。低学年でも多発しない方がよいようです。

■問題発見の指導のめやす

- 1年；教師の出す議題から、どんなものがよいか分かる。
- 2年；身の回り、係から議題が出せる。
- 3年；自分たちで学級生活の中から問題を見つけ、理由を添えて議題が出せる。
- 4年；議題と学級生活の関わりを捉え、理由を添えて議題が出せる。
- 5年；学級・学校の全体的立場から議題を出せる。
- 6年；計画的な議題の取り上げ方ができる。